

後輩たちへのエール！ その59

2022年4月5日

高校生活を振り返って

◇ 今回は、石原伶緒さん（早稲田大学国際教養学部）からのメッセージです！

私は2022年に関高校を卒業した石原伶緒です。関高校での生活や大学受験を、高校を卒業したこの期に振り返ってみようと思います。

高校生活での1番のハイライトは、やはり1年間の留学でしょう。ニュージーランドの高校でネイティブと共に学んだあの1年は、私のかげがえのない思い出です（通っていた高校：下写真）。英語での授業や課題提出に苦労したこと、そんな私をいつも私を気にかけてくれた先生や友達、そして、ホストファミリーをはじめとしたさまざまな人との出会い。ニュージーランドにいた1年間は、日本では得られない経験や人との出会いがたくさんあった貴重な時間だったと感じています。

いま考えると、この留学は自分の適性を知り、その後の進路を決めた非常に意義のあるものだったと感じます。大変だったけれど充実していて、英語力もついたということはもちろんですが、英語で勉強すること、コミュニケーションを取ることは楽しい。外国で生活することってエキサイティングだ。こうした気づきが、のちの進路選択につながりました。具体的に言うと、私は国際系で、なおかつ留学が必須の学部のみを、私立大学では受験しました。また、国立大に合格しても交換留学制度を使って一年間留学しようと考えていました。



次に、大学受験について書こうと思います。まず断っておきますが、私の場合はいわゆる合格体験記ではありません。私は春から早稲田大学の国際教養学部に進学しますが、第一志望の阪大の文学部は不合格でした。

なぜ阪大に合格できなかったのかを振り返ってみると、やはりこの大学に対する熱意が足らなかったからではないかと感じます。熱意と言うと精神論のように聞こえますが、これは言い換えると、なんとしてもその大学に入ってやるという気持ちです。こうした思いがある人は辛いときにもう一踏ん張りでき、コンスタントに勉強を続けられます。一方僕の場合は早稲田の合格発表のあと気が抜けてしまい、あまり勉強に身が入りませんでした。

では、こうした熱意はどこから湧いてくるのでしょうか。僕は二つあると思っています。

1つは、大学の徹底したリサーチです。自分の行きたい大学はどこにあって、どんな人が集まっていて、こんなことを学べる。だからここに行きたい。後輩の皆さんには、ぜひともこれくらい言えるようになってほしいと思います。この大学に入りたいという確たる気持ちは、勉強に向かう大きな原動力になります。

もう1つは、今まで勉強を頑張ってきたという事実、自信です。先ほど熱意があるから勉強できると言いましたが、この反対も正しいと言えます。つまり、昨日まで勉強を頑張ってきたという事実があるからこそ、よし、今日も頑張ろう、という熱意が湧いてくるのです。逆に、なんとなくの勉強しか続けられていない人は、そのまま受験本番を迎えてしまうかもしれません。

大学受験のための勉強方法や参考書などは世に溢れていますが、何より大事なものは、皆さんの大学に合格したいという気持ちです。やる気があって、そこで行動に移すから成功が望める。これは受験に限らず何事にも通じることでしょう。自分に嘘をつかず、高校生活を目一杯楽しみ、充実したものにしてください。みなさんが関高校を卒業したときに、自分の高校生活は悔いのないものだったと言えることを、心から願っています。

◇ 写真紹介 ～ 高校時代に参加した探究的な学び ～



平成30年 ベトナム研修 ファンボーチャウ高校、フエ大学との交流



地域研究部の活動

朝日大学戦国武将作文コンクール最優秀賞、日本考古学協会ポスターセッション最優秀賞・優秀賞、みのかも定住圏イベント「夕雲の城」での発表